

波頭を越えて

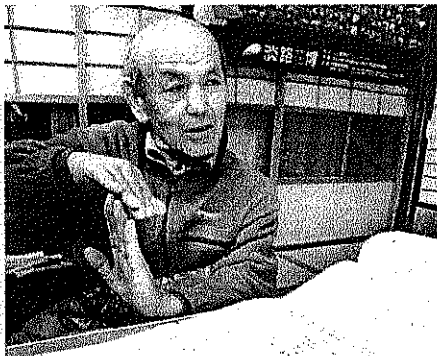
竹島リポート

第1部 ③

拜啓、竹下官房長官殿。のかかわりを付記している。昭和46年12月、当時83歳だったが、「島根県選出の偉い先生だから」と才太郎が頼った館を訪ね、竹島の返還への思いをつづった手紙を竹下登に届けた。才太郎は本人との面会を求めたが会えず、やむなく秘書に手渡して隠岐へ戻った。

五箇村(現・島根県隠岐の島町)の収入役を務めた才太郎は、同村が竹島の地先権を持つにもかかわらず、領土問題が進展しないため竹島の漁ができない現状を打破してほしいと懇願し、竹島と隠岐

権先地の願念



太平洋戦争勃発で開拓断念

「竹島の口」を迎えるに当たって、竹島問題はこれまでにならぬほど取り上げられていた。何十冊とコピーをとり、マスコミや自治体、議員など、思いつくところを全部に送った。

昭和初期まで、山林の多い

五箇村で現金収入を得る手段は、木挽と塩漬けにした魚を島外へ売るに過ぎなかった。だが、大正末期ごろから製材所が発達し、木挽材は売れなくなった。次いで製氷所が発達すると鮮魚が流通し、塩魚は売れなくなる。村民の生活は困窮し、才太郎のいた久見漁港では何度も集会が開かれ、打開策を論じた。竹島の海が海産物の宝庫と知っていた才太郎は「竹島の漁場を活性化」...

の定期便が出ている西郷港までの約6時の山道を5〜6時間かけて越えてこいで泊、さらには朝の船で約半日の道程。少く見積もっても1往復に4日ばかりかかった。だが、「他県開拓は結局断念せざるを得なかった。文字通り、足を棒にして奔走した才太郎の悔しさは、言葉にできないほどだった。李承晩ラインがひかれた。久見の漁師が一方的に締め出された後も、漁協に何の補償もない現状は才太郎にはあまりにも耐え難く、最後まで嘆いていた姿が昭三の目に焼きついている。

韓国マスコミは昭三の自宅へ殺到し、混乱を懇願した警察官が警戒するようになった。

松江へは、久見から本土へ

「今の若い人たちに、声を大にして申し伝えたい。竹島は、そうやって日本人が開拓し、守り伝えてきた大切な領土なんだ。」と

叔父、伊三郎が描いた竹島の地図を広げ、繰り返し聞かされた竹島の話を語る八幡昭三

「島根県隠岐の島町」

松江へは、久見から本土へ

の定期便が出ている西郷港までの約6時の山道を5〜6時間かけて越えてこいで泊、さらには朝の船で約半日の道程。少く見積もっても1往復に4日ばかりかかった。だが、「他県開拓は結局断念せざるを得なかった。文字通り、足を棒にして奔走した才太郎の悔しさは、言葉にできないほどだった。李承晩ラインがひかれた。久見の漁師が一方的に締め出された後も、漁協に何の補償もない現状は才太郎にはあまりにも耐え難く、最後まで嘆いていた姿が昭三の目に焼きついている。

「今の若い人たちに、声を大にして申し伝えたい。竹島は、そうやって日本人が開拓し、守り伝えてきた大切な領土なんだ。」と

(文中敬称略)